

小学校国語科において言葉に関心を持ち、 自ら活用できる児童の育成 —— 個別と交流による一連の活動の工夫を通して ——

長期研修員 森 淳一

《研究の概要》

本研究では、児童が言葉への関心や自信を高め、意欲的に言葉を使えるようにするために「言葉を広げる活動」と「言葉を活用する活動」において個別と交流による一連の活動を設定した。設定した課題を解決する成功体験の積み重ねにより言葉を使える自分自身の力を感得させるとともに、交流活動を通して言葉のイメージを広げたり互いの表現を認め合ったりする経験を積み重ねることで、言葉への関心を高めたり自ら活用したりする児童の育成を目指した。

キーワード 【国語—小 個別活動 交流活動 言葉への関心】

群馬県総合教育センター

分類記号：G01-02 平成29年度 263集

I 主題設定の理由

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（答申）（平成28年12月21日）では、「言語能力の向上は、学校における学びの質や、教育課程全体における資質・能力の育成の在り方に関わる課題であり、文章で表された情報の的確な理解に課題があると指摘される中、ますます重視していく必要がある」と、言語能力育成の重要性が述べられている。また、「国語科は、様々な事物、経験、思い、考え等をどのように言葉で理解し、どのように言葉で表現するか、という言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象とするという特質を有している」とし、言葉そのものを学習することが「国語科における重要な学び」であるとしている。

新小学校学習指導要領国語編（平成29年3月）では、「言語に対する知的な認識を深めるだけでなく、言語感覚を養うことは、一人一人の児童の言語活動を充実させ、自分なりのものの見方や考え方を形成することに役立つ」としている。既知の言葉や新しい言葉に関心を持ち、言葉と事物の関係を自分なりの感覚や経験で捉え、言葉を交流させて試行錯誤と洗練を繰り返しながら、思いや考えを自分の言葉で表現できる児童の育成が国語科指導に期待されている。

就学時の児童は、平均的に5千語の語彙を所有していると言われ、就学後も生活や学習の中から多くの言葉を習得していく。ところが、日頃の学習において、児童は、与えられた表現や使い慣れた言葉を選択しやすく、作文や発表などが定型的な表現になりがちである。繊細な思いも典型的な言葉に当てはめて表現することが多く、言葉を吟味して表現を工夫することは苦手である。語彙を豊かにし語彙力を高めるためには、言葉の知識を増やすだけでなく、積極的に言葉を活用しようとする向き合い方が大事であり、言葉への関心と自信が肝要になる。

他者の言葉を受け入れて言葉を広げる活動と、言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉で表現したり、新しい考えを生み出したりする活動を「個別と交流による一連の活動」として設定する。そして、言葉への関心と自信を高め、自分と他者の両方の言葉を大切にすると向き合い方を体験できるようにすることで、言葉に関心を持ったり、社会に共通する言語知識の習得に加えて自分なりの言語感覚で言葉を捉え活用したりできるように考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

言葉を広げたり言葉を活用したりする場面で、個別と交流による一連の活動を設定することにより、言葉に関心を持ち自ら活用しようとする児童の育成を目指す。

III 研究仮説（研究の見通し）

1 多くの言葉と触れ合う

言葉を広げる場面において、個別と交流による一連の活動を設定することにより、使える言葉の数や種類が増え、言葉のイメージが確かになる喜びを得ることができ、言葉への関心が高まるだろう。

2 自分の言葉と表現を探す

複数の言葉の関連を考えて一つのまとまりある文章を作り、認め合うことを大切にしたい話し合いと推敲によって文章を完成させる場面において、個別と交流による一連の活動を設定することにより、伝わる安心感を得て自分なりに言葉を考えながら表現することに自信を持てるだろう。

3 意欲的に言葉を使う

個別と交流による一連の活動を設定した本学習単元を繰り返すことにより、自信を持って自ら言葉と関わるようになり、活用できる言葉が増えるだろう。

IV 研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 「言葉に関心を持つ」とは

本研究において「言葉に関心を持つ」とは、言葉を大切に思い、積極的に関わろうとする前向きな向き合い方と捉える。それは、個別と交流による一連の活動で、言葉を集め、言葉について考え、文章として表現し、交流で感想を伝え合い、推敲して文章を完成しようとする向き合い方である。

言葉は、音声や文字などで、考えたことや気持ちなどを表現し伝達するというのが主目的であり、集団の共通理解を基に成立している。また、言葉への意識や言葉に関する技能は、それだけが取り立てて学習されるのではなく、社会の規範意識に大きく規定されながら学習されていくものである。児童は、表現力や理解力を高めるために言葉の特徴や使い方を学ぶのである。それは、言葉の決まりを知ることである。言葉の決まりを知って守ることは、伝達の上で重要である一方で、言葉を制約することにもつながる。言葉に関する自由な感覚を鈍らせることなく、自分なりに言葉を感じたり考えたりできることは、言葉を魅力あるものとして捉えることにつながる。言葉への関心が高まることで、児童は、自ら言葉を獲得したり活用したりできるようになると考える。

(2) 「自ら活用できる児童」とは

本研究において「自ら活用できる児童」とは、自分なりの言葉の感じ方と集団の共通理解を基に成立している言葉の決まりの両方を大切に言葉を活用できる児童と考える。言葉からイメージを広げたり、イメージしたことを言葉で表現したり、他者と交流したりする中で、もっと書きたい、もっと工夫したい、もっと言葉を知りたい、という気持ちを持って、関わる言葉や文章の量を増やしたり文章表現を工夫したりできる児童と捉える。

(3) 個別と交流による活動の工夫とは

本研究において「個別と交流による活動の工夫」として、個別で考えた言葉について他者と交流することにより、比較したり同意したり受容したりできる場を設定する。児童は、「個別と交流による一連の活動」を通して、言葉が広がる実感や伝達できた喜びや、交流により言葉が増えたり磨かれたりすることを感得でき、成功体験を積み重ねながら自分なりの言葉の捉え方や伝え方に自信を持ち、言葉への関心を高められると考える。

2 手立ての説明

学習段階	学習活動	学習のねらい
①言葉を広げる	<p><個別> 季節に関する言葉を考えて書き出す。</p> <p><交流> クラス全体で季節に関する言葉を、対話形式で聞き集めて書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別で考えた場合よりも交流活動において多くの言葉と触れ合うことができ、交流することで使える言葉が広がる実感と喜びを得られることから言葉への関心を持てるようにする。
②言葉を活用する	<p><個別> 二つの言葉の連想から、必要な言葉を加えて一つのまとまりある文章を作り出し、書き表す。</p> <p><交流> 互いの文章を見たり聞いたりし合い、感想や意見を伝え合う。</p> <p><個別> 推敲して、季節感のある文章を完成させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の思いや考えを基に、多様な言葉やつなげ方によって文や文章を作り出せることに気付かせる。 ・ 意見交流の場を設定することで相手意識や目的意識を持って分かりやすい文章を書けるようにする。 ・ 作り出した文章が相手にどう伝わるかを知り、修正すべき言葉に気付いたり完成の見通しを持たせたりすることで安心感を得られるようにする。 ・ 満足できる文章を完成できた達成感から、言葉に関心を持ったり自ら活用したりできるようにする。

言葉に関心を持ち、自ら活用できる児童の育成

意欲的に言葉を使う児童

言葉を使う自信

学習活動

児童が得るもの

成功体験

完成の見通し

伝わる安心感

相手意識
目的意識

多様な言葉や
つなげ方の発見

使える言葉が
広がる実感と喜び



言葉を活用する

～自分の言葉と表現を探す～

文章の完成

推敲

交流活動

個別の
思考・表現



言葉を広げる

～多くの言葉と触れ合う～

交流活動

個別の
言葉集め

<児童の実態>

- 使える言葉や表現が少ない。
- 自分の言葉の使い方に自信が持てない。

<教師の願い>

- 言葉への関心を高めたい。
- 言葉を吟味して、使える言葉や表現を自ら増やしてほしい。

V 実践の計画と方法

10月の授業実践につなげるために、7月に特設単元を設定した。研究協力校の第3学年（2クラス）で、個別と交流による一連の活動を設定した2時間の単元を、平成29年7月10日から7月18日の期間で行った。「個別と交流による言葉を広げる活動」と「個別と交流による言葉を広げる活動」による一連の取組を設定した。児童全員が、言葉を集めたり言葉の関連を考えたりして文章を完成し結果をふまえて、教科書教材と関連させた10月の授業実践に進んだ。以下は、10月の実践について示したものである。

1 授業実践の概要

対象	研究協力校 第3学年（2クラス）	
期間	平成29年10月26日～10月31日	（2時間×2クラス）
単元名	「きせつの言葉を集めようー秋・冬ー」（教育出版3年）	

2 検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し1	言葉を広げる場面において個別と交流による一連の活動を設定したことは、使える言葉の数や種類が増える実感につながり、言葉の関心を高めることに結び付いたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートの言葉の数と種類 ・授業の様子の観察及び発話
見通し2	自分の言葉と表現を探る場面において個別と交流による一連の活動を設定したことは、自信を持って自分なりに言葉を考えたり文章として表現したりすることに結び付いたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートのメモと文章 ・授業の様子の観察及び発話 ・完成した文章表現 ・児童の振り返り
見通し3	言葉を広げたり活用したりする場面において個別と交流による一連の活動を繰り返したことは、自信を持って意欲的に言葉を使うことにつながり、自ら関わる言葉の数を増やしたり文章表現を工夫したりすることに結び付いたか。	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートのメモと文章表現の1回目と2回目の比較分析

3 抽出児童

A	自分の思いを書くことが苦手で、自分の気持ちを話すことも得意ではない。自分の思いや考えを持つことができても緊張感から動きが止まり、表現できないことがある。
B	普段の言動は活発であるが、授業では答えに自信が持てないと消極的になりやすい。書くことは苦手ではないが、典型的な表現になることが多い。
C	自分の思いや気持ちを書くことが得意である。発言は控えめだが、想像力豊かに物事を考えて伝えることができる。

4 評価規準

「きせつの言葉を集めようー秋・冬ー」	
国語への関心・意欲・態度	言葉集めや言葉の関連思考、思考内容の表現や意見交流で、積極的に言葉と関わろうとしている。
話す・聞く能力	対話形式で季節に関する言葉を集め、自分が書いた文章の発表や相手の発表に対して質問したり感想を伝えたりしている。

VI 研究の結果と考察

個別と交流による一連の活動を設定した授業構想が、言葉に関心を持ち、自ら活用できる児童の育成

に結び付くことを、「言葉を広げる活動」「言葉を活用する活動」「本活動を繰り返したことによる児童の変化」に分けて検証する。授業実践の結果と考察は以下のとおりである。

1 言葉を広げる活動

(1) 学習活動の概要

季節を表す言葉について考える学習単元である。教科書にある俳句や季語を見たり音読したりした後、秋か冬のどちらかを選んで季節に関する言葉集めを行った。自分一人で考える個別の活動の後、「秋（冬）といったら？」という聞き方で対話形式の交流活動を行った。教室内を移動し合って相手を代えながら季節の言葉を聞き取り、ワークシートに記入した。

(2) ワークシートの分析

全員のワークシートから、個別で集めた言葉と言葉と交流で集めた言葉の、数と内容を分析した。

表1からは90%以上の児童が、個別の活動よりも多くの言葉を交流活動で集められたことが分かる。同じ活動を実践した二つの学級で、集めた言葉の平均値を比べると、個別の活動と交流活動で、ともに2語程度の違いが見られるが、これは活動時間の差が大きな要因である。二つの活動の比較で最も変化があった児童は、個別の活動では1個だったものが、交流活動では10個に増えていた。交流活動の方が数が少なかった児童3人は、個別の活動で10語以上の言葉を書き出していた児童である。また、交流活動はインタビューを相互に行う方法だったため活動時間が足りなかったことも減少した理由だと考えられる。このことから、ほとんどの児童が、この活動によって言葉の数を増やすことができたと言える。

表1 集めた言葉の数

	A組 (27人)	B組 (27人)
個別の活動で集め（考え）た言葉の数（平均）	4.7語	6.5語
交流活動で集めた言葉の数（平均）	6.9語	9.2語
交流活動で集めた言葉の方が多かった児童数	22人	22人
個別の活動と交流活動で集めた言葉の数が同じであった児童数	3人	4人
交流活動で集めた言葉の方が少なかった児童数	2人	1人

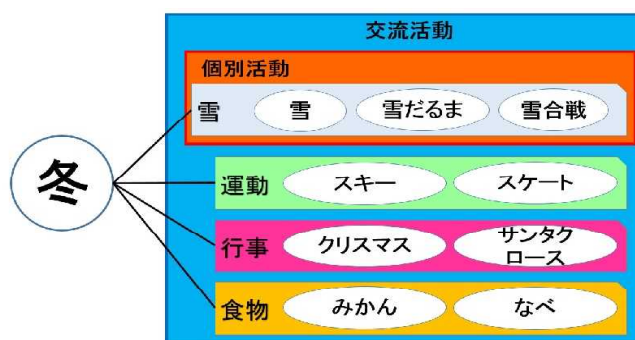


図1 言葉のカテゴリーの広がり（例）

児童が集めた言葉をカテゴリーで捉えて分析したところ、交流活動を取り入れたことで、言葉のカテゴリーにも広がりが生まれていた。例えば、図1で示した児童は、個別の活動では雪からイメージした一つのカテゴリーにとどまっていたが、交流活動では雪からイメージした言葉に加えて、運動に関する言葉、冬の行事に関する言葉、食べ物に関する言葉と、四つのカテゴリーへと言葉の広がりが見られた。

このように、言葉を集める活動のワークシートの分析から、個別と交流による一連の活動によって、言葉の数が増えると同時に、言葉のカテゴリーに広がりが生まれたことが分かる。

(3) 活動中の児童の様子

言葉を集める活動に取り組む児童の様子に着目して分析した。

まず、個別の活動では、ワークシートにすらすら書ける児童もいたが、二つ三つ書いたところで手が止まる児童もいた。時間内は集中して取り組めたものの、思うように言葉を集められずに、がっかりした表情の児童も見られた。

一方、その後の交流活動では、できるだけ多くの言葉を集めようと教師が投げ掛けたこともあって、活動時間の最初から最後まで熱心に言葉を集める姿が見られた。一人の相手から集められる言葉は一つだけにすることを指示してあったため、次々と相手を代えて質問したり答えたりしていた。

中には、「もう『雪』はあるから、他の言葉はない？」と、自分のワークシートに書かれていな

い新たな言葉を集めようとする主体的な姿も見られた。活動時間の終わりを伝えると、「やったあ、10個も集まった」「もっと続けたい」といった児童の声が挙がった。

このように、言葉を集める活動に取り組む児童の様子から、交流活動によって言葉を増やせようという期待感と、たくさんの言葉を集めようという目的意識を持って取り組んだことが分かる。さらに、「他の言葉はない？」と相手に尋ねる児童の姿からは、言葉を増やし広げることにより意欲的になっていたことが分かる。

以上、ワークシートと活動中の児童の様子から、言葉集めの場面において個別と交流による一連の活動を設定したことによって、児童は活動を通して使える言葉を増やしたり言葉のイメージを広げたりできたことが分かった。ぼんやりとしていた言葉のイメージが確かになっていく喜びを感じながら、言葉の広がり気付くことで、もっと言葉を集めたいという前向きな取組につながったものと考えられる。

2 言葉を活用する活動

(1) 学習活動の概要

季節を表す言葉から季節感のある情景を思い浮かべて、文章に書き表した。使い慣れた言葉を改めて見つめ直せるように、二つの言葉の内、一方は交流活動で集めた言葉、もう一方は教師が提示した季節とは結び付きにくい言葉から選んで関連を考えた。例えば「コスモス・笑う」や「雪だるま・忍者」のような言葉の関連である。思考の流れがいつでも振り返れるように、記入した言葉は消さずに残しながら活動した。思い浮かべた言葉を書き出し、文脈が決まったところで文章を書き始めた。次時の活動で互いの意見を出しやすい4人程度の小グループで交流活動を行った後、個別の活動で推敲し、文章を完成させた。

(2) ワークシートなどの分析

交流前のワークシートと交流活動時点で作成していた文章、交流活動後に完成させた文章、児童の振り返りを分析した。

交流活動前と交流活動後の文章を比べて、変化を分析したところ、図2に示したように、交流活動をとおしたことで、文章を変化させた児童が多かったことが分かる。「変化あり」の半数は、言葉を書き加えて文章量を増やした児童であった。他は、順序の変更や言葉の入れ替えといった小さな変更を行った児童と、内容や構成を大幅に変更した児童であった。一方、交流活動をとおしても文章に変化のない児童もいた。

授業後の児童の振り返り結果を分析したところ、表2に示したように、季節を表す言葉については、児童全員が十分に考えられたという達成感を持ったことが分かる。また、「自分の考えや思いを書くことができたか」という質問には「よくできた」と答えた児童が全体の約84%いたことから、書くことに対しても達成感を得られた児童が多くいたことが分かる。

図2と表2の比較から、交流後に文章が変化した児童の割合（76%）に比べて、自分の考えや思いを表現することに「よくできた」と達成感を持った児童の割合（84%）の方が多いたことが分かる。このことから、表現に変化がない場合にも、課題を解決できた達成感と自分の考えや表現に自信や満足感を持った児童のいることが分かる。

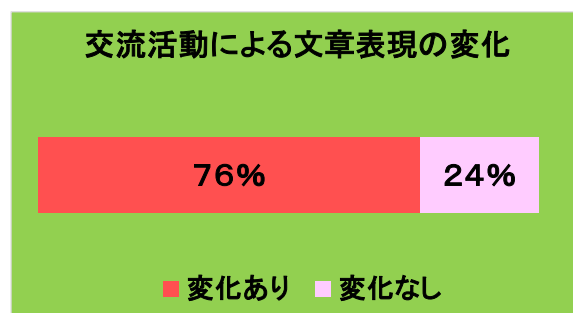


図2 文章の変化

表2 児童の振り返り結果

	季節を表す言葉について考えられたか	自分の考えや思いを書くことができたか
よくできた	83.6%	83.6%
できた	16.4%	14.6%
できなかった	0.0%	1.8%

このように、ワークシートなどの分析から、言葉を活用する場面において、多くの児童が「この言葉を言い換えれば自分の思いや考えが正しく伝わる」「自分の思いや考えを正しく言葉で表現できている」という安心感、課題解決の達成感を得られたと言える。さらに、自分の文章に対しての自信や完成の見通しを持てたことから、「もっと書きたい」「もっと分かりやすくしたい」「自分の文章は相手に伝わるから自信を持って書こう」という、言葉への前向きな関わりにつながったことが分かる。

(3) 活動中の児童の様子

言葉を活用する場面での児童の様子に着目し「個別の表現」「交流活動」「個別の推敲」の三つの活動場面に分けて分析した。

① 言葉を考えて文章として書き表す「個別の表現」

個別で活動する前に、言葉の組合せ方と二つの言葉から発想を広げる方法の全体演習に取り組んだ。児童は想像力や思考力を働かせて文章を作り出すことを理解すると、早くやってみよう、という雰囲気が高まった。個別の活動を開始すると、すぐに考えてみようとする児童の様子が見られた。書き表す段階では、どんどん書き進められる児童もいたが、書き進めることが難しそうな児童や自信のなさそうな児童もいた。「これでいいのかなあ」と不安そうにつぶやく児童も見られたので、表現しやすい書き方を教師が提示し、児童が選べるようにすることで、文章を完成しやすいようにした。箇条書きで書いたり、物語文のように登場人物を使って書いたり、意見文のように書いたり、少ない言葉のまとまりで改行して書いたり、様々な文章スタイルを選ぶ様子が見られた。考えながら動きが止まる姿は見られたが、集中力を途切れさせずに活動できていた。

ワークシートのメモ(図3)からは、「音、動作、誰が、どのように」ということを考えることで修飾表現が豊かになっていることが分かる。また、言葉を吟味して「にやりとわらう」という言葉を選んでいることから、意欲的に言葉と関わっている児童の姿を知ることができた。

② 書いた文章を伝え合う「交流活動」

交流活動では、小グループで文章内容を伝え合うことに取り組んだ。「想像した世界に間違いはない」「想像した内容が分かるように伝え合おう」と投げ掛けたこともあって、児童は互いの考えを知ろうという態度で聞き合うことができた。「じゃあ、読むね」と少し緊張しながら自分の表現を読み始める児童やワークシートを見せながら説明する児童、発表を終えると「どう?」と声を出してグループの仲間の反応を待つ児童や不安そうに反応を待つ児童などの様子が見られた。どのグループでも、発表後には「なるほど」「分かった」など、相手を肯定的に受け入れる反応を示していた。その上で、「季節は冬だね」「サンタクロースという言葉から冬だと分かったよ」と季節を言い当てたり、質問したりできた。質問に答えながら、文章を書き直す児童の様子(図4)も見られた。「雪だるまは、どのくらいの大きさ?」という質問に対して、「家くらい、いや、キリンくらいの大きさかな。あっ!大きな雪だるまなら、すぐにはとけないから長く遊べるぞ」と答えてワークシートに言葉を書き加えた

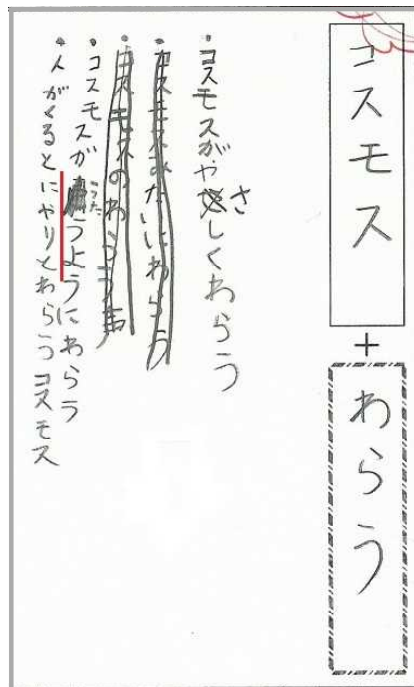


図3 個別活動でのワークシート

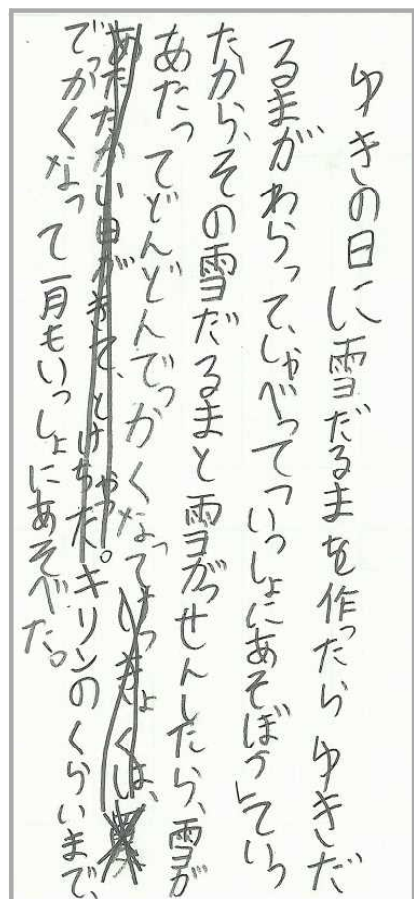


図4 交流段階の文章

り消したりしていた。交流をきっかけに自分の想像世界を広げ、新たな言葉を付け加えたり、あるいは消したりしながら自分の思いにふさわしい言葉と文章に近付けていた。

③ 推敲して文章を完成させる「個別の推敲」

季節感を意識して書いた文章に「きせつの言葉のプレゼント」と題し、伝える相手を思い描きながら個別の活動で推敲と清書を行った。ほぼ全ての児童が、明るい表情で書き進めていた。ある児童は、グループの仲間から感想をもらえたことで自分の文章に自信を持つことができ、ワークシートを見ながら迷いなく書き写していた。助詞などの細かい修正をしながら文章の完成度を高めようとする児童（図5）や、交流活動後に言葉や文の数を大幅に増やす児童（図6）がいた。ワークシートを見つめて考えをまとめた後に一気に書き始める児童や、書き終えた後で更に文を書き加える児童も見られた。活動時間終了後も書き続けて「もう少しで完成するので授業後に提出するのでもいいですか」と言う児童や「ペン書きや色付けまでして気持ちを伝えたかった」と話してくる児童もいて、意欲的な姿が見られた。

言葉を活用する活動に取り組む児童の様子からは、交流活動によって自分の文章が相手に伝わった手応えや安心感を得たり、修正すべき言葉が明らかになったりしたことで、文章を完成できるという見通しを持てたことが分かる。そのことが、言葉を活用できる力の自覚や言葉を使うことへの自信を高めることにつながり、児童の言葉への関わりを前向きにすることができた。言葉への関わりが前向きになった児童は意欲的に言葉を使うようになり、自信を持って自分の文章を書き進める姿、考えながら追記や修正を行う姿、文章の完成度を高めようとする姿などに結び付いたと言える。

以上、ワークシートと児童の様子の分析から、言葉を活用する場面において個別と交流による一連の活動を設定したことで、言葉を自分なりの視点で捉えたり表現したりする言葉の向き合い方につながったことを確認できた。言葉で相手に伝えられる自分の力を児童が実感できたことにより、「もっと書きたい」「もっと工夫したい」「自信を持って書こう」という前向きな姿勢につながったものと考えられる。

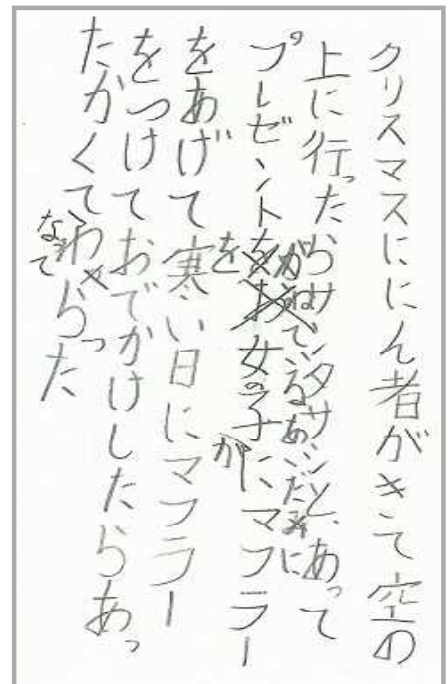


図5 推敲段階の文章①

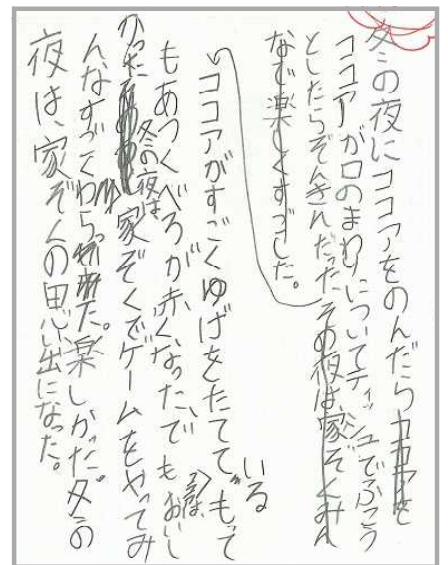


図6 推敲段階の文章②

3 本活動を繰り返したことによる児童の変化

(1) 児童全体の傾向

本活動を繰り返したことによる変化を、児童が完成させた文章表現と活動に使ったワークシートの内容から分析した。7月の活動と10月の活動で見られた変化について、「表現のために自分で加えた言葉の数」と「完成した文章の量」の二つの視点で分析を行った。

「表現のために自分で加えた言葉の数」とは、文章を考える中で、児童が表現のために自分で加えた言葉の数である。その数を調べて比較した結果が、次ページ図7である。7月よりも10月の方が、3語以上の言葉を書き加えた児童の割合が圧倒的に増えていることが分かる。

「完成した文章の量」とは、児童が文章を完成させるのに使った言葉と文の数である。その変化を「増加・同量・減少」に分けた結果が、次ページ図8である。

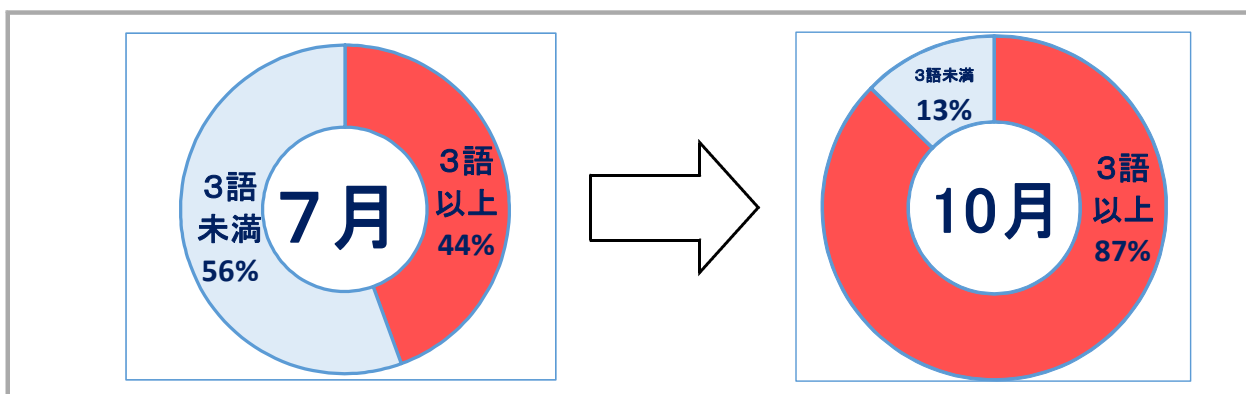


図7 表現のために自分で加えた言葉の数の変化

児童の過半数が7月よりも多くの言葉を使って文章を完成させたことについては、積極的に言葉と関わり、その結果として文章量が増えた児童が多かったと言える。つまり、文章の量が増えた児童の中には「もっと書きたい」「もっと考えを広げたい」と、言葉を増やし意欲的に文章表現に使おうとする言葉の関わりがあったと言える。

一方で、文章量の増加だけでは言葉への積極的な関わりを判断することはできないとも言える。なぜなら、文章の量が減少した児童の中にはワークシートにたくさんのメモを書きながら短くまとめようと工夫する児童もいたからである。10月の「きせつの言葉を集めよう」では、教科書内の俳句の音読に取り組んだこともあって、短い言葉で表現しよう意識する児童もいた。つまり、減少した児童の中には「少ない言葉に思いを込めたい」「短くまとめたい」と、表現の工夫を考えた言葉の関わりがあったと言える。また、「文章をたくさん書こう」といった指示はしていなかったことと併せて、言葉を考えて自分なりに表現することを主目的に掲げてあったために、ほとんどの児童は文章を増やそうという意識は強くなかったと言える。

このように「自ら表現に加えた言葉の数」と「完成した文章の量」の比較分析の結果から、「もっと言葉について考えてみよう」「この言葉を使ったらどうだろう」「もっと書いてみよう」と、言葉に関心を持ち自ら活用できる児童は、活動前よりも増えたと言える。つまり、本活動を繰り返したことにより、児童が自ら関わる言葉の数を増やすことができた。また、多くの言葉に関わったり文章表現を工夫したりできた児童が増えたことから、本活動の繰り返しは、意欲的に言葉を使う児童の姿につながったと言える。

(2) 抽出児童についての分析

本活動を繰り返したことによって、一人一人の児童の文章や言葉への関わりに、どのような変化が見られたかを、抽出児童3名について分析した。

① 抽出児Aについて

7月の活動では「青い」と「かき氷」の関連を考えて表現した。時間内で書いた文は完成に至らず、一文の途中までだった（次ページ図9）。同じ時間内で活動した他の児童と比べて、表現した文章の量はかなり少なかった。思い浮かべた言葉や想像した世界はあったかもしれないが、書いて表現することには結び付かなかったと言える。

一方、10月の活動では「雪だるま」と「忍者」の関連を考え、つながりの見付け方を理解した様子で、イメージを次々に膨らませ、表現に加える言葉をワークシートに書き増やしていた。単語ではなく文として表現した内容から、頭の中で具体的な人物の動きや表情、情景を思い浮かべて、まとまりのある言葉として表現できたことが分かる。交流活動では自分の思い描いたイメージが言葉

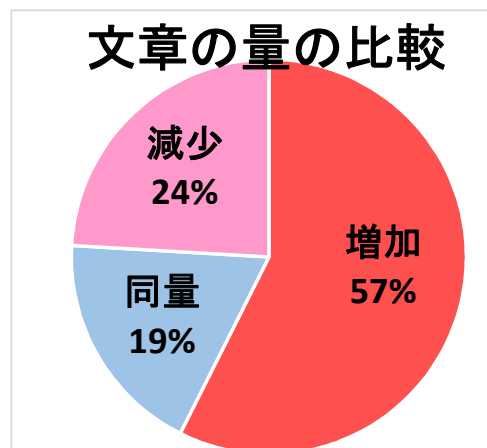


図8 7月と比較した10月の文章量

と結び付いたことを確認でき、自分の表現が相手に伝わる安心感と、自分で物語を考えられたという満足感を持っていた。「二人の子ども忍者」「助けに来る三人目の忍者」「忍者ではない普通の人」と登場人物を増やしていき、起承転結のある物語を短時間で表現できた児童の姿からは、意欲的な言葉への関わりを見ることができた。また、授業内では書き終えられず、「書き終えてからの提出でいいですか」と言ってきたことには、自分の表現を完成させたいという欲求や自分の創り出した想像世界を全て知ってほしいという願望とともに、表現することに自信を持ちながら学習に向かう姿があった。

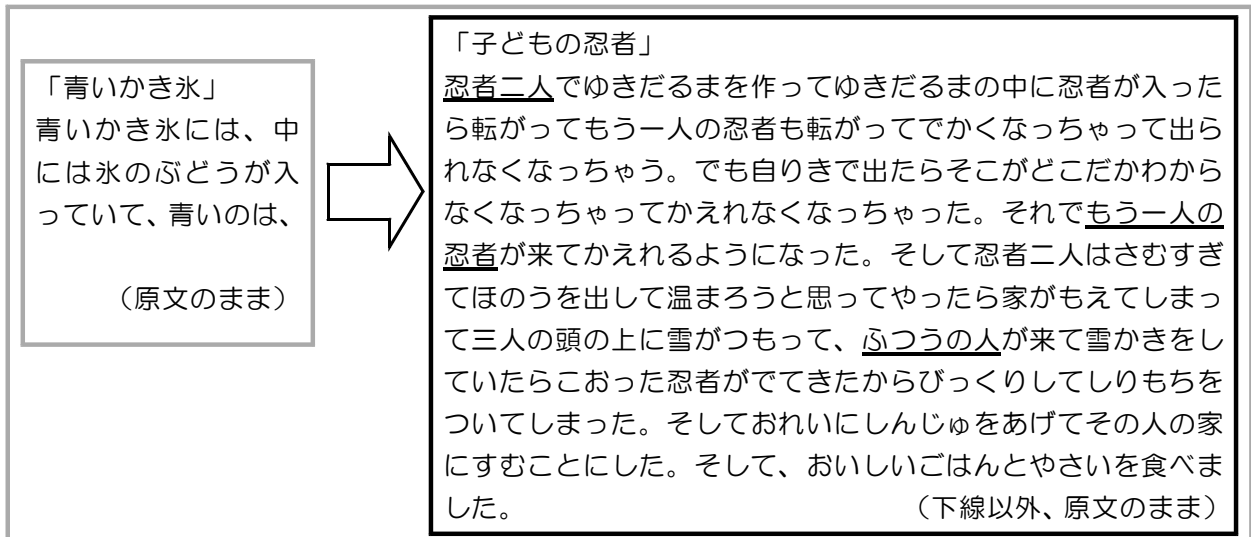


図9 抽出児Aの文章表現の変化（7月と10月）

② 抽出児Bについて

7月は「旅行」と「おばけ」の関連を考えて文章を完成させた（図10）。きっかけとなる始めの二つの言葉の関連から、沖縄旅行や飛行機という言葉思い浮かべながら想像したことを文章に書き表し完成できたのであるが、何となく不満そうな表現であった。「どう、書けた？」と尋ねると、手で隠そうして自信が持てない様子で、納得いく文章にはならなかったという残念そうな表情を見せていた。

10月は「サンタさん」と「夢」の関連を考えての表現であったが、短い文を三つメモに書き、意見交流した後に表現内容を膨らませていた。メモにあった「雪合戦」はなくなり、「とけない雪」と「ずっと遊んでいた」という内容が加わった。交流活動から新しいイメージを思い浮かべ、そのイメージにふさわしい言葉を選び直したことが分かる。書き出した言葉の全てを表現に使うのではなく、使う言葉をよく考えて取捨選択した児童の表現や活動の様子からは、自分の思ったことや考えたことを大切にしようとする気持ち、ふさわしい言葉を選べたという自信、表現を工夫する意識の高まりなどを持てたことが分かる。授業終了時に「先生、見て、こんなに書けたよ」と完成した文章を自ら見せに来た児童の表情は、笑顔で充実感に満ちたものであった。

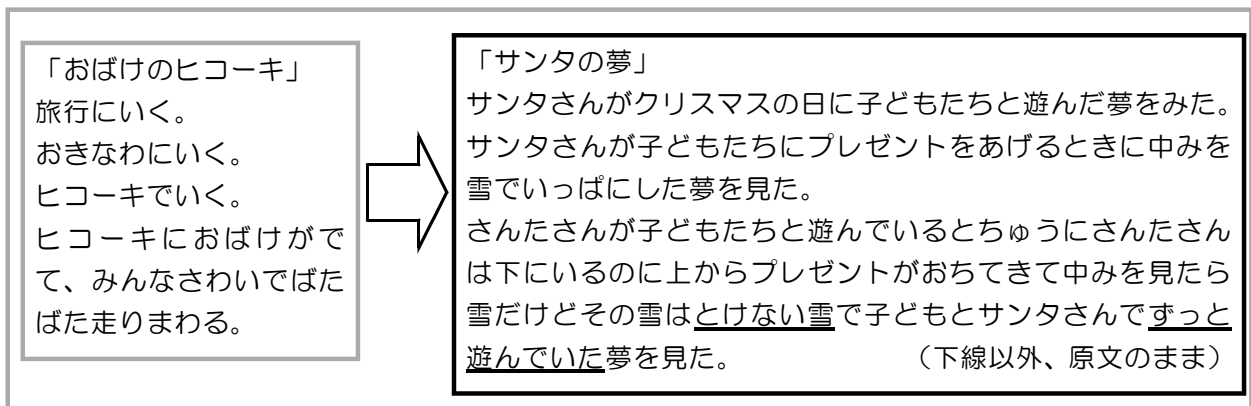


図10 抽出児Bの文章表現の変化（7月と10月）

③ 抽出児Cについて

7月は、「旅行」と「真夜中」の関連を考えて文章を完成させた(図11)。積極的に言葉と関わることができて想像力豊かな表現が見られた。完成した文章に対して「想像を広げ、分かりやすく書いていてすばらしかったよ」と感想を伝えると、大変うれしそうな表情を見せていた。

10月は、「サンタさん」と「忍者」の関連を考えて文章を完成させた。「手紙」という言葉を思い浮かべ、サンタと子ども、子どもと忍者、忍者とサンタの関係を整理しながら文章を考えた。文章内で、かぎ括弧を使って、手紙の文面であることを強調する書き方をしていることから、会話を意識した言葉遣いの工夫が見られる。内容と表記のどちらにも言葉への関心の高さが見られ、相手意識を持ちながら主体的に言葉を使おうとすることができた。このことから、本活動の繰り返しは、想像力や表現力の高い児童にとっても、更なる意欲の向上につながったことが分かる。

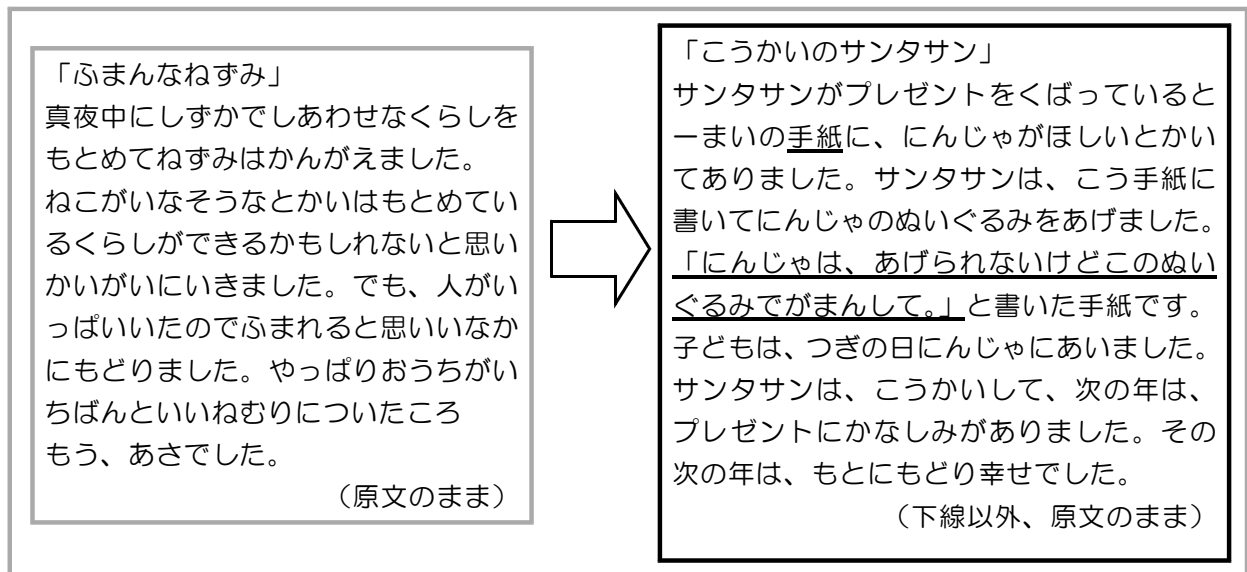


図11 抽出児Cの文章表現の変化(7月と10月)

このように、児童全体の傾向と抽出児童の分析から、個別活動と交流活動を組合せた「言葉を広げる活動」と「言葉を活用する活動」の一連の学習活動を繰り返したことにより、児童が自ら関わる言葉の数を増やしたり、表現する文章の量を増やしたり工夫したりできたことが分かる。複数の言葉の組み合わせから、言葉をじっくり考え、自分なりの思いや考えを大切にしながら想像力を働かせて、頭に思い描いたことを文や文章として表現する、という一連の学習活動を達成できたことは、言葉を使う自信を高めることにつながった。その自信は意欲となり、言葉への関心を高めたり自ら活用する向き合い方に結び付いたりした。

以上、「言葉を広げる活動」「言葉を活用する活動」「本活動を繰り返したことによる児童の変化」に分けた分析結果によって、言葉を使うことへの自信や意欲的に言葉を使う姿につながったことから、言葉を広げたり活用したりする学習場面において個別と交流を組み合わせ一連の本学習活動が、言葉に関心を持ち自ら活用する児童の育成に結び付くことを確認できた。

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 言葉を広げたり活用したりする場面で個別と交流による一連の活動を設定したことにより、児童が意欲的に言葉を使うようになり、自ら関わる言葉の数や文章に表現する言葉の量を増やすことができた。
- 言葉をじっくり考える活動を設定したことで、新たな視点で言葉を捉えながら、多様な言葉やつなげ方を発見することにつながった。

- 自分なりの思いや考えを大切にしながら、表現を完成させるという一連の学習活動を設定したことで、言葉を使える自分を再確認させることができ、言葉を使う自信を高めることができた。
- 学習単元を積み重ねることで、言葉への関心や自信を高め、児童が意欲的に言葉を使うことに結び付いた。

2 課題

言葉に対する関心を高めたり自ら活用したりするために、個別と交流による一連の活動を設定する上で、効果的な場面や回数、教科書教材との関連の仕方を明らかにする必要がある。

Ⅷ 提言

言葉への関心や自信を高め、児童が意欲を持って言葉を使えるようにするために、言葉を広げたり活用したりする場面において、個別と交流による一連の活動を設定することの有効性を確認できた。

<参考文献>

- ・ 国語教育研究所 『国語教育研究大辞典』 明治図書出版（1991）
- ・ 池上 嘉彦 著 『意味の世界（現代言語学から視る）』 NHK出版（1978）
- ・ 金田一 春彦 著 『日本語の特質』 NHK出版（1991）
- ・ 奈須 正裕 著 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社（2017）

<担当指導主事>

尾形 一美 足達 哲也